

遍路宿の建築調査より・・・伝えるべき歴史文化財

犬伏武彦

はじめに

遍路は現代にも続く霊場巡礼の旅であるが、本稿に述べる「遍路宿の建築調査」は明治時代以降昭和初期の間、主に徒歩で四国霊場を巡った遍路が宿泊した建築物に関するものである。そのような遍路宿は愛媛県内において、高知県境の旧一本松町（愛南町）から徳島県境の旧川之江市（四国中央市）まで三十一（旧）町村にまたがる総数四〇七軒を数えた^①。

しかし現在、それらの建物は住宅などに模様替えされ、あるいは取り壊され、人々の記憶から忘れ去られようとしている。「遍路宿の建築調査」は、かつて遍路宿として存在した建築物について、平面・立面の実測、図面作成を行い遍路宿の成り立ちを考察し、遍路の様相と合わせて建築物の特色を研究することを目的とした。調査報告を行った遍路宿は三軒であるが、いずれも遍路文化を伝える重要な建築物と思う。

一、「加登屋」旅館 愛媛県上浮穴郡久万高原町下畑野川下河合

久万高原町下畑野川下河合は、昭和初期一五軒の遍路宿があり「春には、地区全体で一日三〇〇人の遍路が泊まった」と言われる遍路宿集落であった（図一）。なぜ、山間の小さな集落・河合に多くの遍路宿ができたか？それは「打戻り」と呼ばれる位置にあることに理由する。『四国邊路道指南』の

中に、「久万の町、荷物おきすがう山井いわ屋へまうづ」と記され^②、真念は久万に荷物を置き、岩屋寺を打戻りしている。そのように四十四番・大宝寺から河合に着き宿に荷物を預け、四十五番・岩屋寺へ参り（納め札を打つ）、その後また戻って、四十六番・浄瑠璃寺への遍路道を行くことから、河合は遍路の休憩地、宿泊地点となったのである。



図一 かつての遍路宿集落・河合



図二 「加登屋」旅館

「加登屋」は、打戻りの遍路道の三叉路の角にあるところから、「かどや」と呼ばれた地区最大の遍路宿であり、遍路宿としての形態、間取りをよく残している（図二）。建物は母屋、離れ、隠居、三つの部分から構成されている。遍路道に面する「母屋」は明治二九（一八九六）年に建築されたと伝

えられる。母屋裏に接続する三階建ての「離れ」は、昭和四（一九二九）年竣工されたものと推定される。その他の増改築として、母屋左手に（離れの宴会）客が出入りする玄関を造り、さらに家族の居住棟として「隠居」の建築を昭和二〇年以後に行っている。

明治二九（一八九六）年建築当初の「母屋」は、遍路道に面する部分は下屋をもつ茅葺屋根という形態であり、瓦葺の下屋は持送りで軒を深く出し、表の道に面する部分を全て開口部とし、土間出入口を揚げ戸としていた。

建物外観からうかがえる特徴としては、家の内外が一体となるように建築されていることである。道を行く遍路が軒下で休めるように意図され、宿に招き入れる形態として他の遍路宿にも共通する。

母屋の平面は土間、帳場、表の間が表の道に沿って並び、入口土間には店とした四帖がある。それら表の部屋に並行して座敷（図一三）、六帖、仏間が配置されている。なお、敷地の後ろは傾斜地となり石垣を築き建物を支持し、屋根は下屋を持たず茅葺を下げて軒を形造っていた。



図一三 客室とした座敷



図一四 「離れ」竣工時の写真
茅葺屋根が「母屋」

「母屋」の形態・平面から考察されることは、建物は客を泊める宿や旅館として計画されたものではない。建築当初の平面は農家住宅の間取りである

「田の字型」を基本とし、形態も地域に分布していた民家の外観と同様である。すなわち住居である建物の一部、座敷や部屋を客室としたことが、遍路宿へと発展した過程を示している。

部屋の使い方を例にとると、夜中遅くに着いた遍路は入り口土間にある店に布団を敷いて寝たという話や、客が多い日は「隠居」の部屋に遍路を泊め、子供たちは仏間に寝たと伝えられる。また昭和一二（一九三七）年亡くなった日野フデさんの葬儀は遍路を宿泊させる座敷を使っていることから遍路宿の性格がうかがえる。

また、生業として遍路宿のみでは経営が成り立たなかった。「加登屋」の場合、旅館、飲食・仕出し、縄ない・精米・炭屋・質屋を営んでいた。多くの遍路宿も「加登屋」同様、遍路宿のみでは生計が成り立たず、遍路の季節は「遍路を泊める宿」として日常生活の部屋を宿泊室に転用したのである。したがって河合に見る遍路宿は地域の一般的な民家、あるいは民家の形態・平面を基本としたものであると言えよう。

「加登屋」の場合、遍路宿としては「離れ」が注目される（図一四）。一階は傾斜地を利用した物置とし、二階には三帖の客室が二室、女中部屋、納戸。三階は六帖、四、五帖、三帖の三室を客室とし、当初から旅館として計画されている。大正期から昭和初期に興った旅行ブームから遍路客が増え、「離れ」の建築を思いついたのだろう。

「離れ」は、住居ではなく旅館として建築されているが、それは遍路の多様さに理由する。一人、二人連れ、家族連れ、団体など遍路客の多様さに対応するために小部屋を数多くとったのである。遍路の多い季節は、春の彼岸が過ぎた三月中旬から四月上旬、もつとも多い日は五〇名ほどの遍路が宿泊したと言う。

「離れ」の外観形態は、総三階建楼閣風で二方に縁を巡らしている。霊場巡礼と言えども、旅という日常とは異なる過ごし方を考えてか、部屋の内からあたりの景色を見下ろすように建てられている（図一五）。また、「離れ」

建築の理由としては季節が限られる遍路客のみでなく、地域の宴会を行える部屋を設けることも目的の一つだった。

建築構造から見ると小屋組を洋小屋組としているが、昭和初期には近代

に移入された建築技術を消化する力は地方の大工も持っていたことがうかがえる。

遍路宿における遍路の過ごし方はどのようなものであったか？部屋の使い方と合わせて、聞き取ったことを報告する。

河合の場合、遍路は夕方に着く場合が多く、到着すると門付け（お修行）で貰った米を宿に差し出す。何合かを計って、朝晩と弁当に分ける。したがって、米櫃は二合、三合、五合、一升などいくつかの容量のものが用意されていた。場合によっては、「買ってほしい」と、宿賃とすることもあったと言

う。宿の部屋割は数人のグループの場合は一室に、一人・二人の遍路は相部屋とした。なお、座敷の壁に「八畳敷定員十二名」の木札が掛かっている。二畳に三人が遍路宿の基準であったようである。部屋に上がった遍路は、弘法大師の軸が飾られた床の間に（加登屋の前の川で洗った）杖を飾って、仏壇に向かってご詠歌を合唱することも多かった。食事は食堂で、献立は煮菜、吸い物、すまし汁、漬物の精進料理。布団は遍路自身が敷き、午後九時には就寝していた。宿側は朝の出立の時間を聞いて、順々に食事の用意をする

が、午前三時頃から起きて、岩屋寺へ参って来る遍路も多く、往復三時間かかるので宿へ帰ってきてから朝食をとり、浄瑠璃寺へと向かった。



図一五 「離れ」3階の客室から

昭和六〇（一九八五）年まで経営を続けた。その頃の旅館としての客は、県庁から出張で来た人、種の行商人、薬行商人が主であり、わずかに遍路客も含まれていた。山間の小盆地の集落・河合、遍路道沿いに家並みが続く。遍路宿であったと思われる建物が、いまだに残っているところである。

二、坂本屋 愛媛県松山市窪野町

三坂峠から険しい山合いの道（図一六）を下りきって、初めて目にする建物が「坂本屋」である。道に沿って家のうちに一間幅の土間がある。深い軒がつくる陰、土間に置かれた縁台、そのたたずまいは三坂からたどりついた遍路を迎えるように建っている（図一七）。



図一六 三坂峠から下る遍路道



図一七 「坂本屋」

「坂本屋」のある松山市窪野町は、江戸時代から遍路とは深いつながりのあるところだった。遍路は三坂峠を下って窪野に入った。遍路は通過するだけでなく、接待を受け、無銭の者は「門付け」に村の家々を訪ね歩いた。なかにはお堂の床下に一夜を過ごした人もあったと語られる。村人は遍路を受

け入れた。村あげてのお接待には下林・上林（旧重信町）のほうからもやってきた。弘法大師をすがって旅をする遍路を親切にすることは自分自身のためでもあった。三坂峠を下ってくる遍路が見られたのは戦争が始まる昭和一六（一九四一）年まで、その頃のことを「坂本屋へ遊びに行きました。船田（坂本屋）のおばあさんが『志ん屋（中川さんの家の屋号）のぼんか、よう来たなあ。おにぎりでも食べておいき。・・・おばあさんはせわしいてなあ、毎日毎日人が来てなあ。みてみいや、すぐに三坂から人が下りてくるけん。泊まる人もおるで』と言っていたのを思い出します。坂本屋では多い日は四十人も遍路さんを泊めていました。戦争が始まるまでは、そんな様子でした」と、中川重美さん（昭和八年生まれ）が語ってくれた。

「坂本屋」は山間の傾斜地という地形と敷地条件から間口六間、梁間三間の部分が遍路を含む旅人の宿として使われ、家人の居住部分は南側に棟を接続して造られている。なお、建築年代は屋根下地の構造や材料から大正末期から昭和初期と推定した。

「坂本屋」は、一階には八帖と四帖の二室に台所土間、二階には十帖と五帖の二室という間取りで、一階の八帖と二階の二室が客室として使われている。遍路宿として建築の特徴は一階の部屋の前に一間幅の土間を設けていることである（図-8）。道がそのまま家の内につながる。二階の部屋には道に沿った部分を全て窓とし、欄干が設けられている。泊まることを決め、宿に落ち着いた客が欄干の手摺りにもたれる（図-9）。旅をしてきた三坂峠を望み、谷あいの向こうに松山へと広がる景色が見える。遍路を癒す気持ちが建物に表れているように感じるのである。

三坂峠から窪野へと下る道は、四十六番・浄瑠璃寺・四十七番・八坂寺へと続くのだが、その道は遍路だけのものではなく、道は久万を経て土佐へとつづき、また郡中（伊予市）へと海につながる街道であった。

「馬の背に杉材を背負わせて松山へ下りていく姿もありました。長さ二間（約四咫）の材木を負わしていました。木炭を郡中に運んで、帰りは魚を担

いでいる人もいました。浄瑠璃寺の縁日には久万あたりから大勢の人が窪野を通りました。坂本屋は遍路さんばかりでなく、そんな人も泊まりました」

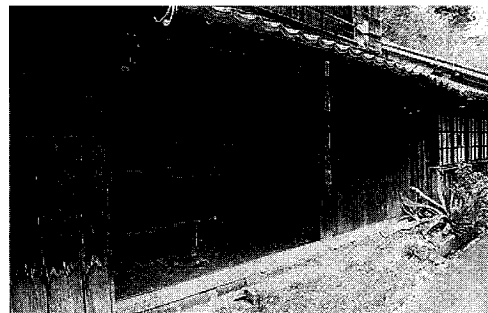


図-8 道に沿った1間幅の土間



図-9 2階の客室

「三坂へ牛を追いついでいる風景も昭和三〇年まで見ました。道後平野のお百姓さんが牛を久万の人にあげるのです。夏に牛を久万に上げるんです。窪野が牛の受け渡し場所でした。石井の方から連れてきて、久万の人に（牛を）渡して三坂へ上って行くんです。『ホイ、ホイ』と牛を追う声が聞こえました。多い日には百頭ほどの牛が列をなしていきました」と、住民が語るように、他国から来る人にとっては松山への入り口に当たるところが「坂本屋」のある桜（窪野町）であった。

「坂本屋」について報告すべきことがある。それは地区住民が中心となって廃屋のように放置されていた「坂本屋」を修理し、畳を持ち寄り、襖や障子を張り替え、地域に伝わる「お接待」をよみがえらせたことである。現在、遍路の休憩所、遍路と地区住民の交流の場として活用されている。

「坂本屋」に残された納め札を見ると、二十歳から六十歳代までと年代は幅広く、そして青森から鹿児島まで日本各地から四国巡礼に訪れ、多い月には五〇人近い遍路が三坂峠を下って来るのである。

三、太山寺の茶屋「井筒屋」

愛媛県松山市太山寺町

五十二番・太山寺の参道には茶屋があった。その歴史は古く『四国遍路道指南』には「ふもとに茶屋あり」と記され、『四国遍礼霊場記』の太山寺絵図にも茶屋が描かれてある。遍路宿でもあるのだが、門前を行く遍路が休んだり、接待に使われたところから「茶屋」と呼んだのだろう。

四軒の茶屋は、参道の下手から崎屋（さきや）、布袋屋（ほていや）、木地屋（きじや）そして井筒屋（いづつや）。今は四軒とも営業を閉じているが、建物は残っている（図-10）。最も奥にあるのが「井筒屋」。当主の姓である「門屋」とも呼ばれていたが、「井筒屋」の名は路地門をくぐった庭にみかけ石で組んだ井戸の井桁からついた屋号である。お経を唱えながら井戸から汲んだ水をかぶり、褌（みそぎ）をしてから遍路に出たと言う。褌は季節を問わず、戦後もしばらくまで見られた遍路の光景であったそうである。



図-10 太山寺の茶屋「井筒屋」

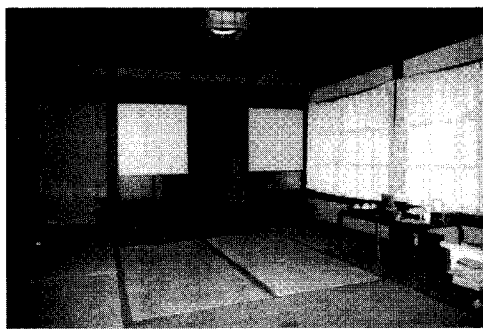


図-11 参道に面する八帖（三等室）

「井筒屋」に入ると、土間（ニワとも言う）と参道に面して八帖の部屋があり、一部が板間となっている（図-11）。そこは「茶屋」の名を表すお接待の場所であった。遍路の季節、春には近郷の村や忽那諸島から来た人たちが、

太山寺の「茶屋」の軒先を借り、小豆ご飯・餅・うどん、ちり紙やお賽銭を接待した。村の年中行事として戦後になっても引き継がれた。また店先の板間では太山寺近辺の名産であった蒟蒻（こんにやく）やあんころ餅、そしてろうそくなどが並べられ販売もされた。現在、道に面して窓となっているが、以前は部戸（しとみど）をはじめ昼間は部を上げ、道行く人が容易に茶屋の中を覗けるような造りとなっていた。土間は格子戸を隔てて奥に炊事場、左には二階へ上がる階段を設けた部屋がある。客室は一、二階合わせて六室あった。

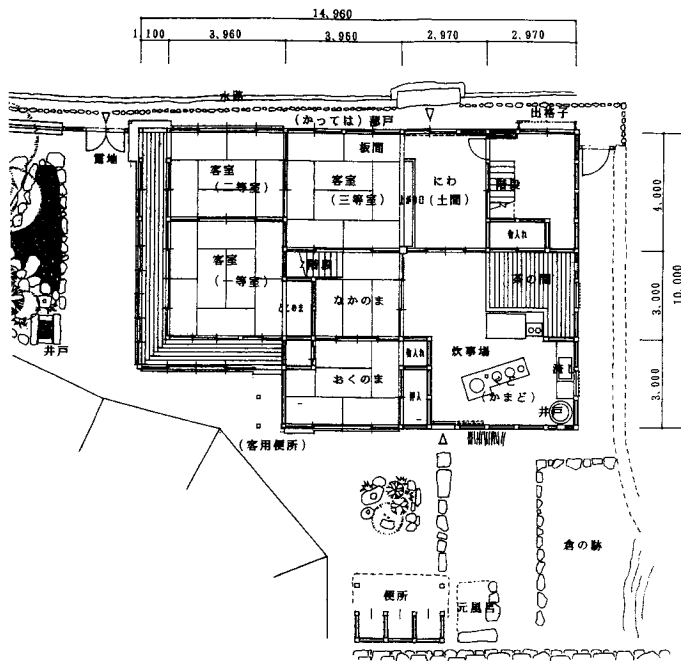


図-12 「井筒屋」1階平面

昭和一七（一九四二）年愛媛県旅館組合聯合会宿泊料認定委員会の客室平面略図に部屋の等級が定められ、一等室は一階の奥、庭に面して縁を巡らせた八帖の部屋（床の間付き）一室のみ。土間から上がった八帖は三等室、あとの部屋は全て二等室となっている。

家人の部屋は三等室の奥に居間（なかのま）そして寝間（おくのま）と続き、炊事場とつながっている。客用便所は一等室に巡らせた縁から裏に突き出たところにとり、風呂は別棟に設けていた。なお、建築当初は部屋を表・裏に二分する平面で、おくのま、炊事場の一部は後に増築されたものである。

建物の平面からうかがえることは、「井筒屋」が農家住宅である「田の字型」を基本として、やや規模を大きくして建築していることである（図-12）。裏まで抜ける土間をとり、表の参道に面して二室、裏側に二室の配置は農家住宅の基本的な間取りである。また、二階は壁を半間後退させ下屋を設け、平面は表裏に三室ずつあるが、客室は一階と同様に鍵の手に三室並べている（図-13）。

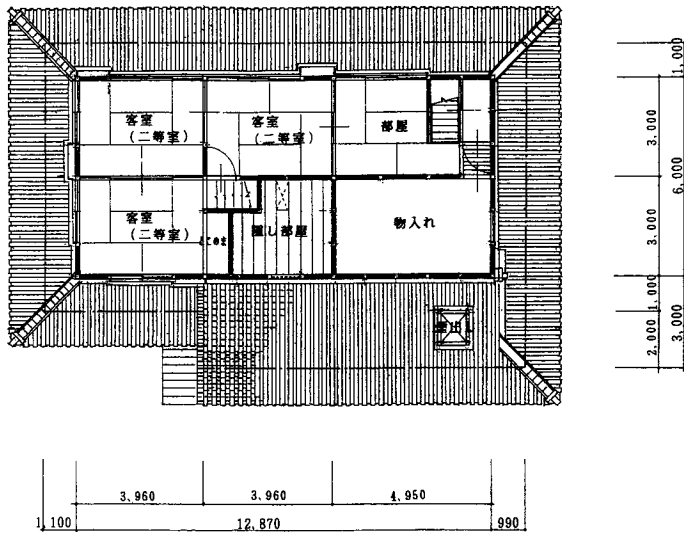


図-13 「井筒屋」 2階平面

建物は旅館として特別の造りではなく、農家住宅を基本とした間取り・形態である。遍路に宿を提供する善根宿、参道を行くお遍路さんをもてなした

「茶屋」・・・遍路道に沿う家が接待に使われ、遍路宿となっていく過程が建築当初の平面からうかがえる。

客室は合わせて六室。二階の柱に掛かっていた部屋の定員を示す木札「第参号定員九人」相部屋はもとより、雑魚寝に近い客室であった（図-14）。

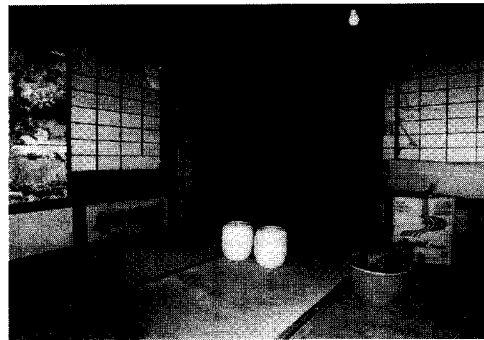


図-14 2階の客室 (定員9名)



図-15 炊事場

門屋基久さん（昭和二〇年生まれ）が、昭和二〇年代後半より三〇年代の遍路の様相を次のように語ってくれた。

「その頃は車で、という遍路さんは一人もありませんでした。あえぎあえぎ参道を上ってきました。声を掛ける雰囲気はありません。誰もが痩せこけ、服装もボロを身につけ、髪はばさばさ、擦れ違ふと汗臭く異様な感じがしました。子供の目にも疲れていると感じました。悲愴感が漂っていました。宿を求める人は、夕方頃来ました。「お願いします」と戸口に立って声を掛けてきました。「これだけ炊いてください」と、袋に入れたお米を差し出すんです。お修行で貰ったものでしょう。献立は山菜、蒟蒻、芋・豆類の精進料理でした」

「大勢泊まっていますが、静かでした。それでも宿に泊まれる人はまだましな方です。中には、（太山寺の）山門の軒下に野宿する遍路さんもありまし

た。拾ってきた木切れで火を起こし、お米を炊いているというのもよく見たもんです。もっと昔は、門の下で冷とうになっていた遍路さんもいたようで、無縁さんの墓がようけあります」

遍路宿は門屋さんの両親が経営していた。「切り盛りは両親二人でしていました。遍路の多くなる春の時期には兄弟などが手助けに来ました。食事の支度をし、客室へ運びます。その片付け、風呂たき、布団敷き、掃除、休む間もなく働いていました」かなりの数の客を賄ったのだろう。炊事場には大きな竈が据えられている(図15)。

太山寺「茶屋」の歴史で興味深いのは近郊の宿泊施設としての役割も果たしたことである。三津に近いことから行商人の宿としても利用された。大風呂敷に包んだ荷を担いだ客が三津や高浜の港から来て宿を取り、三津の芸者、道後からも芸者を呼んだ時もあるという。霊場巡礼の参道に三味や太鼓の音が響いたとは、想像もつかない出来事である。建物も時代とともにあるのだが、戦争との関連では昭和一九(一九四四)年九月、大阪春日出国民学校の生徒二五四名が集団疎開し、太山寺本坊はじめ茶屋四軒に分宿したという出来事もある。

「必死さというか、生きる辛さが姿に見えました。私はまだ子供でしたが、それは感じました。店先でお接待を受けるんです。息を切らせたどりで着いた店先で、ものも言わず接待のお茶を一息に飲むんです。『ありがとうございました』深々と体を曲げてお辞儀をしました。お接待する方の人も、それに合わせてお辞儀するんです。貧しい厳しい時代やったですけど、何か今とは違うものがありました」門屋さんの言葉である。

おわりに

四国といえば、霊場巡礼・八十八カ所と浮かんでくる。「癒しの道」とも言われ、遍路さんの姿を見ない日はない。太山寺の参道にもひっきりなしに

車が行き来する。三〇年前というちょっと昔、子供の目にも悲愴を感じさせるような姿で遍路が歩いた道である。が、かつての遍路宿は忘れ去られ、消えつつある。四国遍路に見る人間や時代や歴史を思い起こさせるのは「六帖の部屋に九人の遍路が一夜を過ごした」と言う遍路宿を目にすることが最もたやすいことであると思う。遍路宿を後世に伝える重要性を提起して報告としたい。

註

(1) 『遍路のこころ(平成14年度遍路文化の学術整理報告書)』(愛媛県生涯学習センター 二〇〇三) 愛媛県市町村かつての遍路宿数と廃業時期より

(2) 真念『四国邊路道指南』(伊予史談会編『四国遍路記集』P・97

一九八一)

(3) 日野道子さんの義母・フデさんが生まれた年・明治二九年に建築された、家人の言い伝え。

(4) 離れ竣工時の写真に写る家人の年齢から推定。

(5) 日野道子さん(昭和二年生まれ)より聞き取り調査による。

(6) 屋根下地の野地板を用いず、垂木に瓦棧を打ち付け瓦をのせる簡略した手法。

(7) 谷鬼代一さん(大正一五年生まれ)より聞き取り調査による。

(8) 真念『四国邊路道指南』(伊予史談会編『四国遍路記集』P・101

一九八一)

(9) 寂本『四国遍路霊場記』(伊予史談会編『四国遍路記集』P・198

一九八一)

調査研究協力者

愛媛の民家研究会「茅舎」会員、田中修司氏、渡部佐紀男氏